OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポール・スコットの『ラジ4部作』と英領インドの終焉
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/52429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ポール・スコットの『ラジ 4 部作』と英領インドの終焉

伊 勢 芳 夫

1. ポール・スコットとアングロ・インディアン作家

「アングロ・インディアン」という呼称は今日では特別の場合を除き，「インド在住のイギリス人」という意味でつかわれることはない．しかしながら，インドが英領であった植民地時代においては，インド在住のイギリス人を指す言葉として「アングロ・インディアン」は使われていたのである．その当時の在インドのイギリス人は，カナダやオーストラリアのアングロ・サクソン系の住民たちと共通する「自分たちの国」という意識を持っていたのである．ただ決定的に違うのは，かつて 19 世紀のイギリスの歴史家の J・R・シーリーが『拡大するイングランド』でも記したように[1]，先住民の存在の大きさである．実際，非白人の権利を代弁する国や世界的機関の存在しなかった 19 世紀において，先住民を殺戮したり僻地に追いやることによって，カナダやオーストラリアを「白人」の国と呼ぶことは可能であったであろうが，さすがに長い歴史と，支配者よりも圧倒的に人口の勝るインドを「白人の国」と呼ぶことはできなかったのである．したがって，イギリスはインドでの支配体制を強化することで，安定した植民地経営を維持しようとしたのであったが，その植民地政策は，それ以前の帝国支配とは質的に大いに違っているということが指摘できるであろう．そしてその植民地政策が，ポスト・コロニアル状況の世界に様々な影響を与えただけではなく，今日のグルーバル化の礎を作ったともいえるのである．

1773 年に就任し，インドの植民地支配の法律的・経済的基盤を最初に整えた初代インド総督のウォーレン・ヘイスティングズの時代から，インドの分離独立の 1947 年までの約 1 世紀半の間には，英領インドにおいて，多くのアングロ・インディアン作家が輩出した．そして彼らの描く「インド」とは，

まさに彼らの時代にアングロ・インディアンが認識するインドの姿を反映したものであった．ラドヤード・キプリングは，英領インドが最も安定していた 1880 年代を『キム』で描き出し，E. M. フォースターは，インド人の間でナショナリズムが強くなってきた時代を『インドへの道』に反映させたのである．そしてポール・スコットは，分離独立前の第 2 次世界大戦中の英領インドの情勢を，『ラジ 4 部作』に描いたのであった．

『ラジ 4 部作』は，『王冠の宝石』，『サソリの日』，『沈黙の塔』，そして，『戦利品の分割』からなり[2]，インド北部の架空の都市マヤポールで 1942 年に起こった 2 つの事件――英国国教会の宣教師で，現地で学校を開いている老女教師がインド人の暴徒に襲われた事件と，イギリス人の若い女性がインド人と思われる数名にレイプされた事件――を中心に，それらの事件の関係者や周辺の人々に広がる波紋を描くことによって，1942 年から 1947 年までの逼迫した歴史状況を描き出している．

このように，『ラジ 4 部作』は，地域的に限定された事件や人々を扱っているのであるが，しかしながら，作品を支配する雰囲気，登場人物の行動や思考に影響を及ぼしているのは，まさに英領インドの状況と，第 2 次世界大戦という緊迫した世界情勢であった．その間の歴史的状況を，作品の登場人物の「声」を反映させながら概説する．

2. 「裏切り者のインド兵」と「チビのジャップ」が攻めてくる

ほぼ 150 年以上続いた英領インドを根底から揺るがす事態が，第 2 次世界大戦と共にやってくる．一つが，これまで啓蒙し，仲間として扱ってきたインド人の反抗的態度や裏切りであり，もう一つは，極東から西進してきた日本軍であった．

第 1 次世界大戦でもみられたことであるが，インドのイギリス人を腹立たしく思わせたことは，インド人のナショナリストたちの戦争協力へのボイコットであった．その中心人物とみられたマハトマ・ガンジーは「悪玉」に仕立て上げられていた．しかも，第 2 次世界大戦では，ヨーロッパ戦線ではナチス・ドイツの脅威に晒され，東南アジアのイギリス植民地であるシンガポールとビルマ（ミャンマー）では，「黄色いチビの」日本人たちに散々な目にあわされてしまう．そして，日本軍はさらに西進し，英領インドに侵攻し

ようと企てており，いわゆる 1944 年に「インパール作戦」を決行するのであった．まさに，大英帝国の危機的状況にあった．そのような状況において，イギリス人が「母となり父となり (“Man-bap”)」[3] 遇してきた大英帝国の臣民であるインド人が，ガンジーたちのように戦争不協力の態度を表明したり，さらには，スバス・チャンドラ・ボースのようにヒットラーや日本に協力しようとしてインド国民軍を立ち上げるなどということは，恩のあるイギリスに対する「裏切り」以外の何物でもなかった．

1942 年のインド国民会議派の「クイット・インディア運動」をきっかけに，統治者であるイギリス人は，ガンジーを含め，会議派の中心メンバーでインド人の政治家を逮捕・拘束するという強硬手段にでるのであるが，『ラジ 4 部作』の 1 作目『王冠の宝石』では，このインド人の指導者の逮捕をきっかけに起こった暴動のさなか，前述した二つの事件が描かれる．1 つは，宣教師で老女教師が，周りの人々の制止にもかかわらず，車で村の様子をうかがいに行く途中，インド人の暴徒に襲われる．その際，彼女の身を案じて同行していたインド人の教師は，暴徒によって殴り殺され，負傷した彼女が呆然と雨の中，その殺されたインド人教師を抱いているところを救出されるが，肉体的にも精神的にも衰弱した彼女は，その後自殺をしてしまう．

一方，その直後に，イギリス帰りのインド青年に好意を抱いていたイギリス人の若い女性が，複数のインド人にレイプされるという事件が起こった．警察はすぐさま容疑者を逮捕したのであるが，その捜査の指揮を執ったイギリス人の地区警察長官は，以前から被害者のイギリス人女性に好意を抱くとともに，インド人と付き合っていることに対して不快感をもっていた．この地区警察長官は事件を知った直後にこのインド人のところに行き，証拠を捏造までして逮捕してしまう．また，たまたま近くで酒を飲んでいたこのインド人と付き合いのあるインド人 5 人も共犯として逮捕するのである．しかしながら，被害者のイギリス人女性が彼らの犯行でないと法廷で証言すると主張し，また逮捕した地区警察長官の行動にも不審な点があることから，当局は白人女性への強姦罪ということを不問に付し，革命に関係したという名目（裁判にかける必要はなかった）で 6 人のインド人たちを数年にわたって留置することになる．その後，この被害者の女性は妊娠していることが分かるが，周りからの中絶の勧めも聞き入れないで，出産し，彼女自身は亡くなってしまう．

このインド青年は，名前をハリ・クマールといい，裕福な父親をもち，イギリスに移住し，イギリス人のように育つのであるが，突然父親が破産し，睡眠薬によって自殺したためにインドにいる親戚の元に引き取られるのである．彼はイギリスのパブリック・スクールまで進み，自己のアイデンティティをイギリス人のそれだと信じており，したがって，戻ってきた親の故郷のインド人のコミュニティにどうしても溶け込めない．さらにクマールを打ちのめすのが，インドに赴任していたパブリック・スクール時代の友人であったイギリス人から，非常に冷淡に，他のインド人に向けるのと同じ視線を向けられることであった．彼はそのような状況に激しい不満を感じ，反抗的な態度をとっていく．ただ，一人のイギリス人女性ダフネ・マナーズだけは彼に好意を寄せるのである．ところが，クマールの眼前で彼女が数人のインド人に強姦されたとき，クマールは地区警察長官によってその主犯に仕立てあげられ，逮捕・投獄されてしまうのである．このクマールは人種的にインド人であっても，イギリス社会に育ち，イギリス人のアイデンティティをもつ人物造形がされているのであるが，しかしそのようなアイデンティティを形成したとしても，インドの支配構造の中におかれれば，否応なしに「主体性」が奪われ，他者として扱われる．つまり，主体者であるかどうかはその人間の本質にかかわるのではなく，肌の色によって決定されるということを示している．イギリス人が，インド人を父や母のように保護し，大英帝国の一員と扱っていると考え，それ故に戦争協力を拒んだり敵に寝返るインド人に対して「裏切り者」と感じるのだが，当のインド人の立場から，そしてそのもっとも「イギリス人化」したインド人ですら，所詮「他者」としてしか扱われないという痛烈な思いを抱かせていることが，クマールの存在によって顕在化される．

一方，クマールを不当に逮捕した地区警察長官のロナルド・メリックに関しては，1 作目の『王冠の宝石』ではクマールの敵役として描かれているだけであるが，2 作目以降，深みのある重要な登場人物として描かれていく．

不当逮捕の後，地区警察長官のメリックは，そのことがもとでインド人から反感を買うだけではなく，疑わしい捜査をしたことで，イギリス人たちからも疎まれるのである．時代は，1919 年のアムリットサルの無差別射撃をした時代よりもさらにインド・ナショナリズムが高揚しているのである．彼はいたたまれなくなったのか，警察を退職し，軍隊に入るのであるが，そこで

彼はテディーという青年と親しくなる．そしてテディーの結婚式で花婿の付き添いを頼まれる．二人が車で結婚式に向かう途中，何者かに石を投げつけられ，同乗していたテディーに当たるのであるが，それがメリックに向けられたものであることが結婚式に参列していた人物から知れ渡るのである．挙式の後，二人はインパール作戦でインドに侵攻してきた日本軍と戦うために戦地に赴くのであるが，ビルマで捕虜になったインド人で日本軍に協力しているインド人脱走兵を見つけ，あくまでもインド人を保護するイギリス人であろうと近づいたテディーは，待ち伏せをしていた敵から不意打ちを食らって戦死する．メリックは，テディーを助け出そうとした時に，彼も負傷をし，片腕を失うことになる．メリックは，その後，テディーの未亡人と結婚をし，インドの独立に向かって激変する情勢の中で，混乱を抑えるために，イギリス人だけではなくインド人のために誠心誠意努力をするのだが，謎の死をとげるのである．

メリックは低い階層出身の人物であり，そのため，クマールのような教養のあるインド人には好感を持てなかった．しかも恋敵ということで，不当な捜査を行ったのであったが，友人のテディーが “Man-bap” あろうとして死んだ姿を見ることによって，彼自身 “Man-bap” として，大英帝国の最大の植民地の終焉で，植民地を舞台にしたイギリス小説のヒーローとして死ぬ道を選んだのかもしれない．

3. インドの主権者

『ラジ 4 部作』は，イギリス人の目から見た英領インドの終焉を描いた作品であるが，単にコロニアル時代の挽歌というだけではなく，サルマン・ラシュディの『真夜中の子供たち』とは違った意味で，ポスト・コロニアル時代との接合点となる作品である．それを考えるために，イギリスのインド支配について振り返ってみよう．

今日，「先住民族」「先住権」という考え方が優勢になっているが，そもそも人類の歴史を通してそのような意識はあまり強くなかったように思われる．少なくとも「勝者の論理」からは無視されていたことは確かであろう．軍事・立法・行政に関して支配権を掌握した者が，正当な主権者と考えられたといえるであろう．

イギリス人のインド，あるいはその一部に対する「主権者」としての意識は，人や時代によって，かなりの幅があったと考えられる．ただ一般的に，インド在住のイギリス人とイギリス本国にいるイギリス人では，インド在住のイギリス人，つまりアングロ・インディアンのほうがインドの主権者意識は強く，本国にいてインドを見る場合は保護領という意識が強かったことは，前述のJ・R・シーリーのインドを見る視線と，キプリングのようなアングロ・インディアン作家のそれとを比較すると一目瞭然である．

「主権者」という意識を持つ者にとっては，インドの安定を脅かす軍隊は「侵略者」であり，それを阻止することは正当な防衛であった．したがって，第 1 次アフガン戦争や 2 回のシーク戦争，あるいはインド大乱から，第 2 次世界大戦に至るまで，戦争を戦うために臣民であるインド人を動員することは当然のことであった．インドが戦場にならなかった第 1 次世界大戦においてすら，インド人をヨーロッパやアフリカ戦線に徴用することはイギリス人の感覚としては問題にならなかった．

このような主権者意識をイギリス人が持っていたとしたら，よく問題にされるのが，イギリス本国において発展してきた「民主主義」と植民地政策との乖離である．イギリスは，英領インドにおいて独自の文明をもつ民族を軍事的・政治的に支配していることに対する正当性をどのように考えたのであろうか．それは，T・B・マコーリーの 1935 年 2 月 2 日のあの有名なインド人の教育に関する演説の『覚え書』が見事に言い表しているように，イギリス人がインドを支配する理由は，因習と迷信に取りつかれ，停滞，もしくは後退したインドの人々を啓蒙し，自由と民主主義を教え広めるということである．つまり，『オークフィールド』の主人公オークフィールドが「社会改革は，世界の人々が要求するようになってきているのだ．そして，どこにもまして賢明なるインド人の求めていることに違いないと想像する.」と言うように,[4]「遅れた社会」を改革し，その人民に素晴らしい「文明の光」をもたらすために統治することが，有為な青年の使命になったのである．ここにおいて支配者という意識は薄れ，社会改良者・保護者としての自画像が描かれるのである．

このように，イギリス人は，インドの主権者であり，社会改革者として，18 世紀末から 20 世紀初頭にかけてインドの植民地政策を展開していったのであったが，それによってインド社会・インド人，そして英語の言説におけ

る「インド」表象はどのように変貌していったのであろうか.

4. 国家としての「インド」・表象としての「インド」

そもそも，イギリスによりインドが植民地化される以前に「インド」という国家が存在していたのであろうか．もちろんムガール帝国は存在し，イギリスの東インド会社設立当時は，その絶頂期にあり，ムガール皇帝の加護なくしては東インド会社の活動はあり得なかったのである．しかしながら，ムガール帝国自体，アフガニスタンを通ってやってきた中央アジアのティムール族のバブールによって樹立された帝国であり，バブールの孫に当たるアクバルは宗教的に寛容な政策をとっていたとしても，先住民のインド人から見れば北からきた異教徒による征服国家であったばかりではなく，インド亜大陸を完全に掌握した中央集権国家でもなかった．また使用言語についても，宮廷のペルシャ語に対して，バラモンのサンスクリット語，そして一般民衆の間では現地語が使われていたことを当時のイギリス人が報告している．

このように，植民地化前のインドは，いわゆる近代的な意味での国家ではなく，ムガール帝国と藩王国の集合体であり，想像の共同体としての「インド」は地図の上でのインド亜大陸には存在しているとはいえなかった．したがって，インド人にナショナリズムは欠如し，その点がすでに近代国家へと社会を変貌しつつあったヨーロッパ，特にフランスとイギリスが少数の人数でもって圧倒的多数のインド人の住むインドを植民地化しえた要因である——ロバート・クライブの伝記を書いたロバート・ハーヴィによると，インド人のナショナリズムの欠如に最初に気づいたのはフランス人のフランシス・デュプレックスであったが，それをうまく利用しえたのはイギリス人のロバート・クライブであった.[5]

クライブ以降，イギリスがベンガルを中心にその支配領域を拡大していくにつれて，単に軍事的支配のもとに経済的利益を吸収するだけではなく，インド社会にヨーロッパの諸制度を導入することによって経済・政治システムに取り込んでいくとともに，インドを英語の言説の中に取り込んでいったのである.[6]

インド，および，その周辺地域の研究調査は，ヘイスティングズの時代から盛んに行われていった．その成果は膨大のものにわたり，地政学的データ

や，動植物，特産品，風俗・宗教や，言語に至るあらゆることが調査され，ヨーロッパの言語で記録され，報告されることによって，博物学的に体系化されていったのである．そのことによって，まさに「アジア」はヨーロッパの言説の中に取り込まれていったのであった．取り込まれるということは，同時に評価づけられるということでもある．

インドの歴史はイギリスによって書き換えられ，インドの習俗は文化人類学的に解体され，見世物にされる．たとえば，サティーやカーストなどがその例であろう．また，言語はヨーロッパの言語学でもって分析され，体系化される．そのプロセスの中，ヨーロッパ人の評価が加わるばかりではなく，彼らが理解しやすいように変形させられ，また理解できないものに対しては不合理・非科学的であるというレッテルが張られる．

また，19 世紀から 20 世紀にかけては，白人種の優位性が，「科学的」・「人類学的」に確立される時期でもあるのだ．ロバート・ヤングが言うように，[7] 1850 年から 60 年代にかけては，生物学，医学，人類学のような科学が，ヨーロッパ人の人種観形成に特別の役割を果たしたときである．人種の特性が記述され，体系づけられていくのである．そして有色人種が白人に従属すべきものとされるのであるが，その従属の程度はさまざまである．啓蒙する対象であると考えるものから，利用する対象，そして根絶させてもかまわないと考える者までいた．

現実には，インド人に対するイギリス人の立場は，啓蒙しながら利用するというスタンスが優勢であった．啓蒙し，彼らの迷妄を正し，社会を進歩させるという態度は，前述のマコーリーの『覚え書』に顕著に出ている．それは，「白人の責務」につながっていく．これはなにもキプリングの発明ではなく，19 世紀のかなり早い段階から意識されていくのである．そしてその「責務」の対価として，イギリス人のインドでの特権が保証されると多くのイギリス人は考えたであろう．

今日，ポスト・コロニアル状況においては，西欧列強による非西洋地域の搾取，人種差別，「声」の剥奪が強調される．そして，「白人の責務」を標榜する植民地を舞台にした小説は糾弾され，『キム』や『闇の奥』などの小説の書き換えが試みられたりする．しかしながら，非西洋地域を後進的であったり，専制・独裁的であると断罪し，ヨーロッパ人によって啓蒙し，文明化しなければいけないというスローガンは，非白人向けの「フィクション（嘘）」

とは必ずしも言えなく，それを信じ，真摯に実行しようとした西欧人もいたのである．もしだれも本当に信じていなければ，そのスローガンを標榜する小説が多くの読者をひきつける力など持たなかったであろうし，「白人の責務」を体現するヒーローに憧れをもつこともなかったであろう．

5. アングロ・インディアン小説とインド

インドの植民地化が進行する 19 世紀を通して，イギリス人のインド人・インド社会を見るまなざしは，当然のことながらインドを舞台にしたアングロ・インディアン作家の作品に如実に反映され，またそこで記号化されたインドとインド人の表象は，アングロ・インディアンの社会だけではなく，イギリス本国，そして世界へと流通していく．

ここでアングロ・インディアン小説の歴史を詳述することはできないが，全般的に言えることは，初期のアングロ・インディアン小説はイギリス人の家庭内の話に終始しているとブパール・シンが言うように,[8] インド・インド人に対する知識の不足と無関心さから「インド・インド人」はほとんど透明な存在であったのが，徐々にある種の実体性を感じさせる表象へと進化していっているのが分かる．ただこれは，先にも述べたように，あくまでも英語の言説の中で成長してきた表象であり，白人の目を通して形成されたものであるとともに，インドの社会の近代化（西洋化）された範囲で，イギリス人と英語でコミュニケーションのとれるインド人が生まれてきた結果でもある．

一方で，F・A・スティールなどの作家は，インドに関する豊富な民俗学的な知識をもとに，つまりインドが英語の知識に取り込まれ，西洋の言語で読み換えられた情報を駆使して，インド社会の表象を構築していく．キプリングもそのような作家のひとりで，彼の代表作の『キム』に対して，著名なインド人の歴史家のニラド・C・チャウドゥーリーは，「美と力と真実のすべてにおいて，我が国の様々な面をことごとく示してくれたということで，我々インド人はキプリングに対していつまでも感謝の念を忘れないであろう」と述べている.[9]

このようなアングロ・インディアン小説の歴史の最後に位置する作家として，ポール・スコットは『ラジ 4 部作』を書き上げたわけである．この 4 部

作においては，英領インドの幕引きの中で，人種的偏見でもってインド人を抑圧する側のイギリス人であったのが，やがて進んで「白人の責務」を背負い，インド独立の橋渡しに奮闘するロナルド・メリックや，イギリスで成長したこととに加えて，父親が彼をイギリス紳士に仕立てることを望んだことから，イギリスの教育政策の目標であった外面はインド人であっても，内面はイギリス人のまさに体現者で，自分のアイデンティティの分裂に苦しむクマールというインド人が描かれている．

しかし，このイギリス人による英領インドの自己評価報告書である『ラジ 4 部作』には，さらに，イギリスの支配下で生まれてきたインド人のナショナリズムについても報告されているのである．

6. 「インド・インド人」表象とナショナリズム

イギリスがインドに持ち込んだものとして，鉄道や橋などが挙げられることが多いが，教育や法制度を通して，近代社会の社会構造を移植，そしてイギリス人が作り上げた「インド・インド人」表象が，実体としての「インド・インド人」に大きな影響を与えてきたと思われるのである．

その最大の影響は，逆説的に聞こえるかもしれないが，インド人にナショナリズムを目覚めさせたことであろう．もちろん，植民地化の最初から，イギリス支配への抵抗はあったし，イギリス人行政官の暗殺も起こっている．しかしながらそれらの反抗は，宗教上の問題や，代々世襲されてきた特権を奪われたことに対する怒り，風習やカースト制を壊されることの不満の爆発であったが，インド国民会議派に代表されるような独立の動きは，まさに西洋近代の意識を教育されたことから生まれてきたのである．ただそのような西洋の「近代」や「民主主義」という思想は，それだけがインド人の知識層に吹き込まれたとするのなら，クマールのような人間しか生み出さなかっただろう．むしろ重要なのは，イギリス人が作り出した「インド・インド人」表象を屈折した形であったとしても受け入れていくことによって，彼らの想像の共同体としての「インド」，彼らのアイデンティティとしての「インド人」モデルを提供することで，ナショナリズムの核を与えたことであったと言えるのである．そしてそのインド・ナショナリズムの台頭は，イギリスの植民地政策にとっての脅威であったが，皮肉な言い方になるかもしれないが，こ

れは素晴らしい成果だともいえる.

7. ポスト・コロニアルの時代へ

ただこの「成果」としてのインド人のナショナリズムの自覚が, 日本軍のインド侵攻に協力するという形で顕れたことに対しては, かなりの衝撃を受けたものと思われる.

イギリスは, 第 1 次世界大戦, そして第 2 次世界大戦に, 自らの主権を守るために, 多くのインド兵を動員した. 特に第 2 次世界大戦においては, 軍国主義で, 領土的野心から牙を向いたドイツと日本の邪悪な企てを阻止することが戦争の重要な大義になった. しかしながら, 自らのインドを守る大義, つまりイギリス領を守る大義との本質的な矛盾が, インド人の独立の希望を抑えることをこれ以上不可能にしたのであろう. 少なくとも, チャーチルの保守党の選挙での敗北は, それに拍車をかけたと思われる.

イギリスのインド統治の大義として掲げた理念によって, インド人にナショナリズムが芽生えたといっても, 一方では, それを遅らせるように, ムスリムとヒンドゥーの対立をあおる政策をとったことも歴史家の認めるところであり, それがコミュナル対立を深刻化させ, インドとパキスタンの分離独立, ラシュディやクシワント・シンの作品にみられるような, 独立前後から今日まで続くムスリムとヒンドゥー教徒の血みどろの争いにつながっているのであろう.

このようにみてきたとき, イギリスによる植民地支配を糾弾することはできても, その影響を無視することはできないであろう. ポスト・コロニアルのインドは, 植民地化された「インド」をも含めた様々な融合体であり, それを一切否定することは, まさに原理主義の立場に立つことである.

注

1. J. R. Seeley, *Expansion of England* (London: Macmillan & Co., 1883, reprinted 1921), p. 216 を参照.

2. *The Jewel of the Crown* は 1966 年, *The Day of the Scorpion* は 1968 年, *The Towers of Silence* は 1971 年, *A Division of the Spoils* は 1975 年に出版された.

3.『沈黙の塔』に出てくる言葉で, "Man-bap" は, 支配するイギリス〔人〕とインド

〔人〕の関係をウルドゥー（ヒンディー）語の母と父を表す言葉を使って言い現わした表現である.

4. W. D. Arnold, *Oakfield; or Fellowship in the East* (London: Longman, 1854), pp. 119–20 を参照.

5. Robert Harvey, *Clive: The Life and Death of a British Emperor* (New York: Thomas Dunne Books, 2000) を参照.

6. Bernard S. Cohn, *Colonialism and Its Forms of Knowledge* (Princeton: Princeton UP, 1996) を参照.

7. Robert J. C. Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race* (London and New York: Routledge, 1995) を参照.

8. Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Oxford UP, 1934) を参照.

9. Nirad C. Chaudhuri, "The Finest Story about India—in English," *Rudyard Kipling: the man, his work and his world* ed. John Cross (London: Weidenfeld & Nicolson, 1972), p. 32 を参照.